



元禄 12 年<1699 年>建立の本殿

上ノ國八幡宮御由緒

御祭神 譽田別命（応神天皇）

合祀神 天照太御神、大鷦鷯命、火産靈命、大山祇命、倉稻魂命

御由緒概要

当社は、文明五年（一四七三）松前氏始祖「武田信廣」公が勝山館（現国指定史跡「勝山館」跡）に守護神として創立、館神（館神八幡宮）と称した。

蠣崎氏は永正十一年（一五一四）二代蠣崎光廣が大館（松前）に本拠を移し五代慶廣の時豊臣秀吉によって蝦夷島主と認められ、安東氏より独立するに至り、徳川家康の時代に姓を松前と改め、後に江戸幕府下の一大名として位置した。

上ノ國は、藩祖草創の地として藩主の直領とされ当社は松前藩の崇敬殊に厚く、歴代藩主は一代に一度必ず参詣し、毎年正月には藩主名代が代参する慣しであった。

現本殿は元禄十二年建立の本道最古の建造物で一部彩色の一間社流れ造りで、本殿を明治九年に勝山館より現在地に遷した。

拝殿は弘化二年（一八四五）江差町・正覚院に「金毘羅堂」として建立され、明治九年（一八七六）に当社拝殿として移築したものである。（平成十九年修繕「瓦葺き替え他」）。社室として松前氏十三代道廣公、十四代章廣公の書と、室町様式と伝えられる笏谷石製の狛犬などが伝えられている。

石灯籠について

（1987年（昭和62年）

6月25日北海道新聞掲載記事より）

森閑と静まる上ノ国八幡宮の拝殿前に、高さ二・五メートルほどの石灯ろう一對が据えられている。向かって右の台石にツル、左にカメがうづくまり、その上に立つサオ柱は昇り竜、下り竜が彫られ、火袋は六角形。さらに宝珠の上に大ぶりにタカが鋭いくちばしを下に向けてとまっている。

灯火用具の研究家の今村智也さん（札幌）は「さまざまな石灯ろうや灯火器の研究書にも、八幡宮のこの石灯ろうのような豪華なものは見当たらない」といつている。

なによりもタカがとまっているのが珍しい。台座には、明治二十六年に奉獻したときの世話人・笹浪兵悟、草間常太郎、笹森石蔵ほかの氏名が刻まれている。



*他にも、第二鳥居をくぐり境内右側（社殿に向い）石垣沿い中ほどに、「連理の杉」があります。